

変容的学習理論における「省察的実践」の意義 —— Gary Rolfe による看護実践論の視点からの試論 ——

永 井 健 夫

I 変容的学習理論と省察的実践

様々な経験をとおして知識や技能を学び、培った能力や考え方をもとに生活や社会活動を営むこと、これを絶えず繰り返しているのが人間の一生であろう。このことは人類が誕生した時点で始まっていたはずであり、元来、人間の生涯は学び続ける過程であった。20世紀が生み出した新たな理念の一つが「生涯学習」であるが、これは、もとより「生涯的」であった人間の学習を制度的・政策的に支え、そうすることで社会を維持・発展させようとする考え方である。このような意味での生涯学習についての理解・関心が広まるにつれ、子どもだけでなく成人や高齢者も学習する存在であるということが社会的に再認識されるようになった。そして、制度的・政策的な支援の対象となることが稀であった成人学習者に対して、では、どのような教育的関与が望ましいのか、考えなければならなくなった。

こうしたことが背景となって成人教育学、特に成人学習論やアンドラゴジー論が発展してきたわけだが、成人に相応しい学習支援の在り方を問うことは、成人期の学習の意義や本質は何かという問いにも繋がる。その問題の解明に尽力した研究者の代表的存在として Mezirow, J. (1981, 1991, 2012) を挙げることができる。彼は、解釈・判断の在り方や行動・態度の取り方などに影響を及ぼす認識の枠組み (frame of reference) をより優れたものに改めてゆく過程である「変容的学習 (transformative learning)」を成人期における最も重要な学習と捉え、その原理的特質や教育的・社会的意義などについて長年にわたって考察している。この変容的学習の過程を成り立たせる最も基本的で中心的な要素となるのが「省察 (reflection)」である。あるいは、経験を捉え直すことをとおして学ぶ「省察的学習 (reflective learning)」によって展開するのが変容的学習だとも言える (永井, 1990, 2007)。

Mezirow は、既に1977年には、変容的学習理論のもととなる「パースペクティヴ変容」の考え方を提起していたが (Mezirow, 1977)、その理論が本格的に発展するのは1980年代になってからである。そして、1991年には、それまでの議論の集大成として *Transformative Dimension of Adults Learning* が刊行された。彼の主張をめぐっては、1980年代以降、21世紀に入ってもなお、*Adult Education Quarterly*、*International Journal of Lifelong Education*、*Studies in the Education of Adults* などの専門誌において数々

の論稿が著され、彼の変容的学習理論は成人教育研究者の重要な関心事の一つになっている。

変容的学習に関する研究や議論が勢いよく展開していた1980年代、同じく「省察」を鍵とする別の学習理論が Schön, D. A. (1983, 1987) によって提起された。すなわち、「省察的实践 (reflective practice)」論であり、これも今日に至るまで、専門職の教育・訓練の在り方や専門的能力をめぐる議論に多大な影響を与えている。省察的实践とは、簡単に言えば、実践者が専門的な行為に取り組むなかで適切な解を見出してゆくこと、つまり、教科書が教えてくれない知恵や技能に気づく過程のことである。1970年代より、Schön は Argyris, C. らと共に、組織的な場における学習——実践者が頭で理解している「信奉理論 (espoused theory)」ではなく実際に用いられる「行使理論 (theory-in-use)」に気づく過程——に注目した研究を重ねてきており (Argyris and Schön, 1974, 1978)、彼らが探究した「行為の科学 (action science)」の延長に省察的实践論があるものと理解できる (永井, 2004a)。

Mezirow も Schön も、その主張や議論の背景となる直接の文脈は異なるものの、「省察」に着目して思考や学習のことを説明した Dewey の考え方を継承しているという点では共通している⁽¹⁾。そして両者とも、成人の学習過程の意味や成人教育実践の在り方について理解・検討するうえで、特に注目すべき論者であると言える。このうち、Schön は1997年に比較的若く他界してしまった。そのこともあってか、Schön が自らの論稿において Mezirow について論じる例は見当たらない。他方、Mezirow が追究し続けてきたテーマ、つまり認識能力の構造的な変容に焦点を当てて成人の学習について説明することによって、省察的实践論には参照すべき要素や論点が多く含まれている。実際、Mezirow は Schön の議論に注目しており、「行使理論」の現れ方やそれを特徴づける条件に関するモデル論 (Mezirow, 1990, pp. 370–373)、新たな気づきに至る契機としてのメタファーをめぐる考察 (Mezirow, 1991, pp. 81–82)、そして「行為内省察 (reflection-in-action)」の過程 (ibid. pp. 112–114) について検討・言及している。しかしながら、Mezirow が Schön の議論に相当の関心を持っていることは明らかであるが、自らの主張への理論的な位置づけについては中途半端な感が否めない。省察的实践論は変容的学習理論に対してもっと積極的に関連付けることが可能であると思われる。以下、その試みの一つとして、看護実践と省察的实践との関係について考察を重ねてきた Rolfe, G. の主張を媒介として、省察的实践の意義について考えてみたい。

II イギリスにおける看護の教育・訓練と省察的实践

先ず、Rolfe の看護実践論の背景にあるイギリスの看護の世界について簡単に触れておく。1970年6月、看護師と助産婦の役割を検討するための委員会が、Asa Briggs

教授を委員長として設立され、1972年に報告書 (*Report of the Committee on Nursing*) が作成された。Briggs Report と呼ばれるこの報告書は、看護師や助産婦の養成に関する政策・制度、そして専門職としての看護職の位置づけなどに強い影響を与えたことから、イギリスの看護の歴史における最も影響力のある政策文書のひとつとされている。そこでは、「研究があらゆる看護師と助産婦の『精神的装備』の一部であるべきで、専門職はもっと研究に根拠づけられるべきである」(Gerrish and Lacey, 2010, p. 323) と主張された。実際、イギリスにおける看護師の教育・訓練は、それまで病棟における徒弟制的な方法論が主流であったのが、この報告書を機に、カレッジを基本とする高等教育の場における養成という、全く別次元の在り方に移っていった。

その結果、Schön が専門職の実践や教育の効果を損ねるものとして批判した技術的合理性の支配がイギリスの看護の世界にも訪れ、個人が実践的に得た知識よりも研究から得られる「命題的知識 (propositional knowledge)」が優先される傾向が強まっていった。しかしながら、看護は、研究に根拠づけられた専門職として直線的に発展していったわけではなく、1980年代初頭には理論と実践の乖離が問題視され始めた。そして、「看護の知識が概念化され、生成され、教えられ、実践に適用される方法に革命を起こすこと」(Rolfé, 2002, p. 24) を期待させるものとして「省察」への関心が広がり、その方法論としての省察的实践が注目されるようになる。ところが、依然として技術的合理性の支配力は強く、省察的な知識・方法の根拠は定量化されない主観的なものだと批判されることや、省察的实践の賛同者までもが「実証性」の不足を不利な点と捉えることも見られた。こうして省察的实践は、技術的合理性の偏重を克服・転換するものとして期待されたものの、「支配的なパラダイムの一部となり、技術的合理性に代わるものをもたらさぬまま、むしろ、新たな技術的ツールになってしまった」(ibid.)。看護教育や臨床指導の場においては、省察的な方法が取り入れられるようになる一方、その本来の価値が十分に認識されないというジレンマが生じていたのである (pp. 23-25)。

その後もこのような状況は変わらないままで、そのことに関して Rolfé は、省察的实践は大きく誤って理解され、間違った応用がなされていると指摘する (Rolfé, 2014, p. 1179)。では、何が誤りなのかといえ、省察的实践とは実践が行われている最中の省察、つまり「行為内省察」が為されることに基本的な意味があるにもかかわらず、終わった実践行為を後から振り返る「行為への省察 (reflection-on-action)」に取り組むことが省察的实践だと理解されてしまっている点である。

Schön 自身は、この語をあまり頻繁には用いていないし、明確な定義も示していない。だが、「行為への省察」の語の直後に「試合中には決して“考える”ことがない投手でさえ、勝手のきく安全なロッカールームで試合のフィルムを喜んで振り返る (review)」(Schön, 1983, p. 278) と付記されている例が示唆するとおり、終えた行為につ

いて後から考えることを「行為への省察」として Schön が捉えていることは確かであろう。省察的实践を成り立たせる省察はこの種の省察ではなく、この点に関して Schön (1992) は次のように述べている：

「省察的实践」という語句における省察という言葉は——私の視点からすれば、誤解を導いていると思われるのだが——Hannah Arendt が「立ち止まってるの考察 (stop-and-think)」と呼ぶもの、つまり、行ったことについて言語的に判断しながら振り返って考えるための小休止を連想させる。ところが、ここで私が考えている省察とは、行為の真っ最中に、つまり行為する現在 (action-present) と私が呼ぶ状態において生じるものであり、それは言葉による媒介を用いる必要はない。(p. 125)

実践行為が展開する中で、それを中断することなく、自らの実践行為と行為の対象との相互作用の状態を探ってゆくのが「行為内省察」であり、これが十分に試みられないのであれば、Schön の主張する意味での省察的实践とはならない。そして、Rolfé にとって行為内省察は、看護師の養成教育や看護実践に多大な影響を及ぼしている Benner の看護論の限界を超える鍵として、重要な意味を持つのである。

Ⅲ 再帰的な省察的实践

1) Benner の看護論

イギリスで看護の理論と実践との関係が問われ始めた1980年代初め、合衆国の看護学研究者である Benner (1984) が、理論的知識とは別の「実際の看護実践に内在している」(p. 1) 実践的知識に着目した看護論を提起した。Benner は、コンピュータ科学の研究者である Dreyfus, H. L. と Dreyfus, S. E. による技能獲得の段階論(「ドレイフス・モデル」)(Dreyfus & Dreyfus, 1980)を応用し、「初心者 (Novice)」「新人 (Advanced Beginner)」「一人前 (Competent)」「中堅 (Proficient)」「達人 (Expert)」という5段階のレベルの看護師が現場でどのように考え振る舞っているかを分析した。そして、看護実践の領域として「援助役割」「教育とコーチングの機能」「診断とモニタリングの機能」「容態の急変を効果的に管理する」「治療処置と予薬を実施し、モニターする」「医療実践の質をモニターし、確保する」「組織能力と役割遂行能力」の7領域があることを明らかにした。これらの研究を踏まえて Benner が主張したのは「看護は、その実践の基礎となる知識(ノウ・ハウ)を発展させなくてはならないし、科学的研究や観察を通して、臨床のなかにうもれている専門技術のノウ・ハウを記録し発展させなくてはならない」⁽²⁾という考え方であった。

5段階の最上位にある達人レベルの看護師は、的確に作用する豊かな実践知を備え

た人のことで、低位の段階の看護師が依拠するような規則、ガイドライン、格率 (maxim) などの「分析的な原則」に頼ることなく、「多くの的外れの診断や対策を検討するという無駄をせず、1つひとつの状況を直観的に把握して正確な問題領域に的を絞る」(Benner, 1984, 訳書, 26頁) ことができる看護師である。当然のことながら、経験の蓄積がこのような優れた実践能力を培うわけだが、Benner にとって、経験は「単なる時間の経過や長さ」を指すものではなく、「理論にニュアンスや微妙な違いを加える数多くの現実の具体的な状況に遭遇することで、先入観や理論を改良すること」(30頁) であるという。そのような意味での経験から得られる「範例 (paradigm case)」に依拠することで、達人の優れた行為能力が発揮されるのである。つまり、過去の経験を参照しながら実践に臨んでいるのが達人であり、Benner が技術的熟達 (expertise) を培う省察として捉えているのは「行為への省察」であると言える。

2) 試行的理論を培う再帰的实践

このように Benner は、状況を直観的に把握し、適切な対応を取ることができる達人の実践力が、行為への省察によって培われた個人的知識をもとに成り立っていることを明らかにした。しかし、その熟達者が実践状況のなかで瞬間、瞬間に何を考え、どのようにして問題解決を図っているのかということ、つまり実践的行為の最中で試みられる省察については十分に説明しようとしていない。Rolfé はこの点に Benner の「達人」の限界を認め、それを超えるものとして「再帰的实践者 (reflexive practitioner)」という実践者像を提起する。Benner の達人も、自らの経験に対する省察から得られる実践知に基づいて実践に取り組んでいるという点では、「省察的实践者」である⁽³⁾。しかし、その達人は「自らが身を置いている臨床状況のことを鋭く意識している」(Rolfé, 1997, p. 96) わけではない。望ましいのは、実践状況のなかでの自らの行為とそれが及ぼす影響に自覚的である実践者である。それが再帰的实践者であり、その省察的实践は「扱っている課題に対する鋭い集中力を伴うような特別な注意深さ (mindfulness)」(ibid.) をもって進められる。

そのような再帰的实践の過程を動かすのが「行為内省察」である。それは「理論と実践の両方を含む循環的な過程であるがゆえに、省察的であるだけでなく再帰的でもある」(Rolfé, 1996, p. 38) 過程で、理論と実践が「即応的な実験 (on-the-spot experiment)」を介して相互に応答しあうような関係で展開する。この場合の「理論」は、定理的に確立された「公式的理論 (formal theory)」ではなく、「試行的理論 (informal theory)」である。すなわち、「特定の状況にある特定の患者に関する私的で個人的な理論」(Rolfé, 1997, p. 95) であり、一般的・原理的な説明体系として実践を方向付ける公式的理論とは異なり、個別・具体的な文脈のなかで生成し作用する理論である⁽⁴⁾。典型的な患者や看護師の像を描くことができるかもしれないが、現実の患者も看護師

も一人ひとり異なる存在である。また、病名としては同じであっても、その病状が当事者にとって（心理的・社会的な意味も含め）どのように作用するかは千差万別である。臨床場面は一つ一つが独特であり、そこには公式的理論の適用では解決できない問題も多い⁽⁵⁾。ゆえに、看護師は「行為内省察と即応的な実験をとおして自分自身の試行的理論を生み出す」(Rolf, 1993, p. 177) ことに取り組まなければならない。その理想像が、Rolf の言う再帰的实践者としての看護師である。

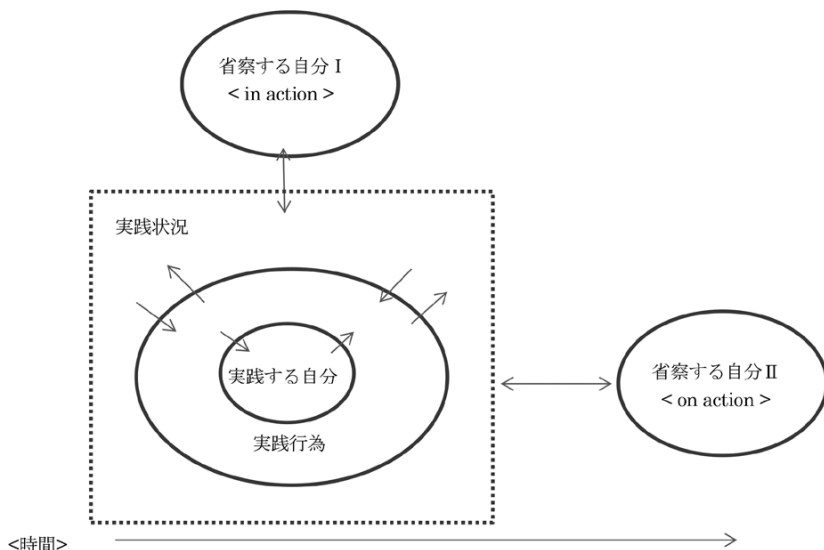
IV 省察的实践の構図と可能性

1) 省察的实践と「自分」の関係

上述の「行為内省察」という用語には「思考と行為を統合しようとする Dewey 支持者の精神」(Schön, 1992, p. 123) が反映されている。また、Rolf によると、Dewey は「知識はモノではなく行為または関係性である。それは名詞であるよりも動詞である」(Rolf, 1993, p. 1181) と捉えているという⁽⁶⁾。では、行為内省察それ自体における思考と行為の関係はどのようなものと理解すべきなのか？この問いが省察的实践論を理解するうえでの重要な鍵の一つであると言える⁽⁷⁾。

同じ問題を別の角度から捉えているだけのことかもしれないが、筆者としては、「思考」(精神)と「行為」(身体)との関係とは別に、思考する主体の二元性に注目したい。省察的实践の過程で点検・検証されるのは「自分(自我)」の判断とその作用である。そこには「自分」が「自分」によって対象化され、行為や思考・判断を推進していく「自分」とそれを見守る「自分」という関係が成り立つ。たとえば、Rolf が再帰的实践に取り組む看護師について「自分自身、というより Casement (1985) が「心の中のスーパーバイザー (internal supervisor)」と言及するものとの連続的で静かな対話」(Rolf, 2002, p. 28) に取り組んでいると述べているように、見守る側の「自分」はこの「心の中のスーパーバイザー」のようなものだろう。

Casement (1985) によると、精神分析医やセラピストの研修の初期段階では、安心して症例に向き合えるようにスーパーバイザーが研修者を支える。次第にそのスーパーバイザーの助言や洞察は研修者の内面で統合され、それらは「内在化されたスーパーバイザー (internalized supervisor)」となる。更に最終段階になると、研修者は自律的に省察できる能力を得て、患者と自分自身のそれぞれを観察する「心の中のスーパーバイザー」が働き始めるのである (Casement, 1985, pp. 30-32)。これに倣えば、省察的实践の過程に登場するのは、現に実践に取り組む「自分」と、それを見守る「心の中のスーパーバイザー」としての「自分」である。意識レベルか行為レベルかを問わず、「自分」が客観世界や自分自身と関わり合っている状況を、もう一人の「自分」が観察し、必要に応じそこに干渉する。その様子を描けば〈図〉のようになろう。



〈図〉 省察的实践における「自分」

2) 認識変容と人間理解に向かう省察的实践

ところで、省察的实践論は専門的な職務や専門教育の文脈で取り上げられることが専らであり、本稿でも看護職という専門領域の例をもとに検討を試みた。しかし、省察的实践は専門的な能力や巧みさ（artistry）の習得にのみ有効な方法論なのであろうか？

Rolfe が「理論と実践は分かち難い全体性の中に閉じられており、そこで省察的实践が試行的理論を生み出し、再帰的な理論が実践を修正し発展させる」（Rolfe, 1993, p. 176）と言うように、行為の中で「理論」と「実践」のギャップを点検・修正してゆく省察的な作業が省察的实践である。看護の方法に関する基本的・原則的な公式的理論と、個々の看護師が実践の場で働かせる試行的理論の二つの次元があるのと同じように、専門職の世界に身をおいているわけではない生活者にも、生き方や行動の仕方に関する価値規範や基本信条と、具体的な場面や関係性における実際の調整や判断という二つの次元がある。そして、普段の社会生活や日常的な活動の中で、物事の進め方や他者への関わり方などに関して信じている方法や慣れ親しんだ手順だとうまく事が運ばない場合、あるいは経験したことの無いような事例や相手に向き合わざるを得なくなった場合、それらに対処することを諦めず、意志をもって臨むのであれば、何らかの手立てを試して状況の変化を確認し、捉え方や考え方を修正し、更に事に当

たってゆくということになろう。そうして、少しでも「厄介な問題」に対処するなかで、その人の価値観や世界観が変わってゆく場合もありうる。そうした流れの中で試みられる省察的な努力は、省察的实践の過程と本質的には同じようなものだろう。そうであれば、省察的实践は「専門教育」の方法論に限られる必要は無く、認識変容に関わる主要な過程の一つとして捉えることができる。

先に触れたとおり、Mezirow も（十分に精緻な水準とは言えないのだが）Schön の議論を変容的学習論の観点から解釈し、行為内省察に伴う問題の枠組設定と実験的な検証の過程が新たな「意味パースペクティブ（meaning perspective）」につながるものであることを示唆している。そして、変容的学習理論にとって重要な省察概念の捉え方を整理する論稿において、Schön の省察的实践論を（「主観の枠組再構成」に対比される）「客観次元の枠組再構成」に関わる「批判的前提省察（critical reflection of assumptions）」の一つとして位置付けている（Mezirow, 1998, p. 192）。

ここでの「客観次元」とは道具的学習に関連しているという意味のようだが、では、省察的实践は道具的で技術的な域を出ないのであろうか？確かに、省察的实践、あるいは「省察的实践演習（reflective practicum）」の具体的な場面として Schön が取り上げるのは建築設計、音楽の演奏、都市計画など、技術的解決が主要な課題となる事例である。しかし、本稿で注目した看護の世界に関しては、技術的解決の能力だけで専門性を語ることは出来ない。Rolféによると、看護実践においては、技術的なアプローチへの関心に引きずられることにより「患者を道具的に見なし、データ源として、また作用が及ぼされるべき受動的な対象として捉え、主体ではなく客体と見なすような傾向」（Rolfé, 2015, p. 147）となる。それを克服するものとして Rolfé が重視するのが（省察的实践もその一つであるところの）解釈学的アプローチである。このアプローチは、看護師と患者が「共有された理解に行き着くこと」を目指すもので、「その人に特有の欠乏、ニーズ、夢、欲望、強み、そして弱みがある人格として他者を経験することを可能にする」（p. 149）という。「行為への省察」であれ「行為内省察」であれ、省察的实践に含まれる省察の過程は看護行為と患者の関係について、そしてまた看護師自身の在り方について、絶えず問い続ける過程としても現れる。ゆえに、そこには人間理解や解放に関わる変化や学習が伴うこともありえるだろう。

以上、省察的实践論と変容的学習理論の関係を探る試みとして、Rolfé の看護実践論の観点から省察的实践について検討してみた。実践状況に即した試行的理論を生み出す試みであるという点に省察的实践の主要な意義の1つがあること、省察的实践は「自分」が「自分」を対象化する過程としても理解できること、そこには認識変容や人間理解につながる可能性が含まれていることなどについて素描したが、これらは試論の段階にとどまるものである。本稿では取り上げなかった「普遍性」と「唯一性」

の関係、理論と実践をつなぐものとしてのアブダクション (abduction)、「人間的な科学 (human science)」という視点など、Rolfé の議論は、省察的実践論と変容的学習理論との関連性について考えるうえで示唆的な論点を多く含んでおり、更に検討を重ねたい⁽⁸⁾。

〈注〉

- (1) 「省察」と成人学習論の関係を検討したものとして、永井 (2004b) がある。
- (2) Benner (1984) の訳書の新訳版 (ベナー, 2005) に収載された「訳者あとがき (初版)」(262頁) における井部俊子の記述。
- (3) Rolfé (1997) も「達人の看護師とは、行為への省察をとおして自らの経験を個人的知識や範例へと転化させる省察的実践者である」(p. 95) と述べている。
- (4) 関連する議論として、Usher and Bryant (1989) の特に第4章 (pp. 71-96)。
- (5) Rolfé (2006, p. 40) は、看護実践のために必要なのは、「大数の科学 (science of large numbers)」ではなく、「唯一性の科学 (science of the unique)」であると指摘している。
- (6) Dewey (1910, pp. 184-185) の記述を指すものと思われる。このほか、Dewey (1933) は、省察的思考の過程を説明する中で、その最後の局面 (phase) を「行為による仮説のテスト」としている (pp. 113-115)。
- (7) この点に関しては、「精神による身体制御」および「身体化された省察」という二つの観点の対比をとおして検討する三品 (2014) の考察が示唆的である。
- (8) Rolfé の論稿を集めたものとしてロルフ (近刊) がある。

引用・参考文献

- Argyris, C. and Schön, D. A. (1974) *Theory in Practice: Increasing Professional Effectiveness*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Argyris, C. and Schön, D. A. (1978) *Organizational Learning: A Theory of Action Perspective*. Reading, Massachusetts: Addison-Wesley.
- Benner, P. (1984) *From Novice to Expert: Excellence and Power in Clinical Nursing Practice*. Menlo Park, California: Addison-Wesley [ベナー, P. (井部俊子監訳) 『ベナー看護論 新訳版—初心者から達人へ—』医学書院, 2005].
- Casement, P. (1985) *On Learning from the Patient*. London: Tavistock Publications [ケースメント, P. (松木邦裕訳) 『患者から学ぶ—ウィニコットとビオンの臨床応用—』岩崎学術出版社, 1991年]
- Dewey, J. (1910) *How We Think*. Boston: D. C. Heath & Co.
- Dewey, J. (1933) *How We Think: A Restatement of the Relation of Reflective Thinking to the Educative Process*. Boston: D. C. Heath & Co.
- Dreyfus, S. E. and Dreyfus, H. L. (1980) *A Five-stage Model of the Mental Activities Involved in Directed Skill Acquisition*. Research report supported by the Air Force Office of Scientific Research (AFSC), USAF. <available from <http://www.dtic.mil/dtic/tr/fulltext/u2/a084551.pdf>>
- Gerrish, K. and Lacey, A. (Eds.) (2010) *The Research Process in Nursing*. [6th ed.] Chichester, West

- Sussex, U.K.: Wiley-Blackwell.
- Mezirow, J. (1977) Perspective transformation. *Studies in Adult Education*, 9(2), 153 – 164.
- Mezirow, J. (1981) A critical theory of adult learning and education. *Adult Education*, 32(1), pp. 3 – 24.
- Mezirow, J. (1990) Conclusion: Toward transformative learning and emancipatory education. In: Mezirow, J. and Associates (Eds.), *Fostering Critical Reflection in Adulthood: A Guide to Transformative and Emancipatory Learning*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Mezirow, J. (1991) *Transformative Dimensions of Adult Learning*. San Francisco: Jossey-Bass [メジロー, J. (金沢陸・三輪建二監訳)『おとなの学びと変容—変容的学習とは何か—』鳳書房, 2012].
- Mezirow, J. (1998) On critical reflection. *Adult Education Quarterly*, 48(3), pp. 185 – 198.
- Mezirow, J. (2012) Learning to think like an adult: Core concepts of transformation theory. In: Taylor, E. W., Cranton, P. and Associates (Eds.), *The Handbook of Transformative Learning: Theory, Research, and Practice*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 三品陽平 (2014)「ショーンの『省察的実践』論における『行為の中の省察』再考」『日本デュイ学会紀要』第55号, pp. 11 – 20.
- 永井健夫 (1990)「認識変容としての成人の学習—J. Mezirow の学習論の検討—」『東京大学教育学部紀要』第29巻 (1989年), pp. 331 – 339.
- 永井健夫 (2004a)「省察的実践論の可能性」日本社会教育学会編『成人の学習と生涯学習の組織化』(講座 現代社会教育の理論Ⅲ) 東洋館出版.
- 永井健夫 (2004b)「成人学習論としての省察的学習論の意義について」日本社会教育学会編『成人の学習』(日本の社会教育 第48集) 東洋館出版.
- 永井健夫 (2007)「変容的学習と『成人性』の関係をめぐる試論」『大学改革と生涯学習』(山梨学院生涯学習センター紀要) 第11号, pp. 107 – 116.
- Rolfe, G. (1993) Closing the theory-practice gap: A model of nursing praxis. *Journal of Clinical Nursing*, 2 (3), pp. 173 – 177.
- Rolfe, G. (1996) *Closing the Theory-Practice Gap: A New Paradigm for Nursing*. Oxford: Butterworth-Heinemann.
- Rolfe, G. (1997) Beyond expertise: Theory, practice and the reflexive practitioner. *Journal of Clinical Nursing*, 6 (2), pp. 93 – 97.
- Rolfe, G. (2002) Reflective practice: Where now? *Nurse Education in Practice*, 2(1), pp. 21 – 29.
- Rolfe, G. (2006) Nursing praxis and the science of the unique. *Nursing Science Quarterly*, 19(1), pp. 39 – 43.
- Rolfe, G. (2014) Rethinking reflective education: What would Dewey have done? *Nurse Education Today*, 34(8), pp. 1179 – 1183.
- Rolfe, G. (2015) Foundations for a human science of nursing: Gadamer, Laing, and the hermeneutics of caring. *Nursing Philosophy*, 16(3), pp. 141 – 152.
- ロルフ, G. (近刊)『看護実践のアボリアーD・ショーン《省察的実践論》の挑戦』(塚本明子訳) ゆみる出版.
- Schön, D. A. (1983) *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. New York: Basic

- Books [ショーン, D. A. (柳沢昌一・三輪建二監訳)『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』鳳書房, 2007].
- Schön, D. A. (1987) *Educating the Reflective Practitioner: Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. San Francisco: Jossey-Bass [ショーン, D. A. (柳沢昌一・村田晶子監訳)『省察的实践者の教育—プロフェッショナル・スクールの実践と理論—』鳳書房, 2017].
- Schön, D. A. (1992) The theory of inquiry: Dewey's legacy to education. *Curriculum Inquiry*, 22(2), pp. 119–139.
- Usher, R. and Bryant, I. (1989) *Adult Education as Theory, Practice and Research: The Captive Triangle*. London: Routledge.